

至った。試作を重ねて製造したお菓子をカンボジアへ空輸した（Fig.3-13）。その後、現地の学校のおやつ時間に提供した。現地でお菓子を食べた子ども達からビデオレターが届いた（Fig.3-14）ため、事業のまとめの授業の際に生徒たちに展開した。「自分たちが製造したお菓子が国境を越えて、外国の子ども達にわたり、外国の子ども達が笑顔でそれを食べている姿を見て、人のために事業を行うことの素晴らしさを感じた」という感想をもった生徒が多く見られた。



Fig.3-13 現地に空輸したお菓子



Fig.3-14 現地の学校でお菓子を提供した時の様子

3つ目の事業は「地元の規格外作物を用いたお菓子を保育施設に届ける事業」である。こちらは現在進行している事業である。

安城市はいちじくの生産が盛んであるが、市場に並ばないような規格外の商品もたくさんある。それらを用いてお菓子を製造して、地域の保育施設に提供する事業である。

まず、NPOの方に規格外いちじくに関する講義を行っていただき、その後、地域のJAの選果場で規格外のいちじくの見学を行った（Fig.3-15）。その後、グループで規格外いちじくを用いたお菓子を検討し、JAの担当の方にプレゼンテーションを行った（Fig.3-16）。今後は試作を重ねて、レシピを決定し、2月のバレンタインデーに地域の保育施設に提供する予定である。



Fig.3-15 JAの選果場で規格外作物について見学している様子



Fig.3-16 検討中のお菓子をJAの担当者にプレゼンテーションしている様子

このような地域連携事業では、生徒は課題解決を目的として事業に取り組むことができる。事業には相手があり、相手が求めていることを考え、努力して試作を繰り返して達成していくことはとても意義深いことであると考えられる。また、高等専修学校にはコミュニケーションが苦手な生徒が多いが、そのような生徒も地域連携事業や企業連携事業の際には、教員、生徒だけでなく、外部の方とコミュニケーションをとる機会が多い。このような面からも地域連携事業、企業連携事業は高等専修学校と親和性が高いように思う。こういった機会は、学校単独ではなか実現することはできない。地域の方々や企業の方々に協力をいただき、実施していくことが高等専修学校生にとって何にも代えがたい経験になると考える。